

今、「この瞬間」を 生きのびる子どもたち



フジテレビアナウンサー
やまなか あやこ
山中 章子さん

2017年8月、ミャンマー政府軍がミャンマー北西部のラカイン州に住むイスラーム教を信仰するロヒンギャの人々の掃討作戦を始めました。1カ月に6,700人が殺され、5歳以下の700人の幼い子どもたちが命を絶たれました。隣国のバングラデシュには、国境のナフ川を渡って、これまでに120万人が避難し、そのうち6割に当たる70万人が子どもたちだ、と伝えられています。今年3月、バングラデシュの難民キャンプを取材したフジテレビアナウンサーの山中章子さんに聞きました。

キャンプは劣悪な生活水準

—バングラデシュ南東部のコックスバザールのロヒンギャ難民キャンプを訪ねられました。

バングラデシュ軍の許可をとって、現地では約2週間、取材しました。コックスバザールは国内で最も貧しい地域なのですが、実は世界最長の120kmのビーチがあるリゾート地でもあり、漁業が盛んです。でも、難民キャンプは森林保護区の山を切り開いてつくったところで、保水力がない。訪ねたときは乾季の3月で、車で走ると砂ぼこりが舞い上がり、視界はゼロでした。

—どんな住まいなのですか。

配給されたビニールシートと竹を組み合わせて作った簡素な住まいが、ひしめき合っています。プライバシーなんてありません。今にも崩れ落ちそうな崖っぷちにも建っている。現地のユニセフの話では、雨季に入って、すでに地滑りなどが起きていると聞いており、とても心配です。

—どんな暮らしですか。

食糧は、国連などの支援機関からの配給です。でも、十分ではありません。難民キャンプには、ブロックごとに「マジ」と呼ばれるリーダーがいます。モスクもあり、1日に5回礼拝があります。ユニセフが学習支援を行っていますが、子どもたち全員が通えているわけではありません。われわれが訪れたときは、逃れてきてから約7カ月たった時期で、生活水準は劣悪ですが、コミュニティーはできています。少しずつ、「村」ができていっているような感じを受けました。実は難民キャンプでは、昨夏から1万6,000人以上の赤ちゃんが生まれています。

—仕事などは、あるのですか。

国籍はなく、就労ビザもないので、正式には働けません。厳格なイスラーム教徒なので、「女性は家中」という意識が強く、外の仕事は男性の役割。巻きたばこなどの商品を手に入れてきて、キャンプ内で売る人や、道路工事をしている人もいました。少額のお金をもらって働いているそうです。意外だったのは、屋根の上に置いてある小さなソーラーパネルを時々見かけたこと。おそらくミャンマーから持ってきたのだと思いますが、携帯電話の充電に使っていました。携帯電話を持っているのは少数だと思いますけど、離ればなれになった家族と再会したり、連絡をとったりするための重要なツールになっているのだと思います。

—マラリアなどの感染症で、子どもたちが命を落としています。

環境は、不衛生としかいいようがありません。トイレは20人に1つが理想とされていますが、ひどいところは、100人に1つ。飲み水を確保する井戸とトイレは、少なくとも30m以上離れていなければならないのに、井戸のそばにトイレがあるところも。感染症の蔓延を防ぐために、国連の医療機関によって予防接種が行われていますが、雨季を迎えて、こちらも心配です。

深いトラウマを抱える子どもたち

—難民の半数以上を占める子どもたちの様子は。

予防接種を受けたくないという女兒に出会いました。15歳のヤスミンちゃんです。ミャンマー軍に襲われたとき、ロケットランチャーで腕に大やけどを負い、その傷痕を見られたくないからと言うのです。ヤスミンちゃんに限らず、子どもたちは、目の前の現実とともに、大変な過去を背負って生きています。住み慣れた村を焼き尽くされたり、親を殺されたり。着の身着のまま川を渡る途中、力尽きる人、栄養失調で亡くなる人……。そんな光景を目の当たりにして、深いトラウマを抱えている子も多いと思います。やっとたどり着いた難民キャンプでは、頭に薪を載せて運んだり、水を運んだり、露店で店番をしたりたくましく暮らしていますが、今年2月には、野生のゾウが侵入して、子ども1人を踏み殺す悲劇も起きてしまいました。

—取材は、どのようにされたのですか。

ヤスミンちゃんを含めて、3人の子どもに密着取材しました。12歳の少女、ボリアちゃんはミャンマーでも学校に通っていませんでしたが、取材の日、初めて国連機関が難民キャンプで運営する学習施設に行き、ミャンマー語の勉強をしました。そして、もう1人が14歳の少年、ハリス君です。

—取材の途中に、ハプニングが起きたそうですね。

ハリス君らを何回か訪ねていたのですが、ある日、私たちは突然、住民から取り囲まれました。私たちがキリスト教に改宗させるために活動しているのではないかと疑われて……。ミャンマーでの壮絶な過去がトラウマとなり、疑心暗鬼になっている難民も多いでしょう。取材の目的をしっかりと話して、最後は笑顔で別れましたが、取材の難しさを感じました。また、ハリス君と話していると、今度はハリス君の面倒を見ている叔母が「何のために

何回も来るの」と怒声を上げ始めました。

—どうなりましたか。

改めて家の中で話を聞こうとしたのですが、叔母は「2度と私の家に来ないで」と声を荒げました。そのときハリス君が「なんでそんなこと言うの」と涙を流し始めました。ハリス君は「何も話すな」と言われていたのですが、ミャンマーでの悲惨な現実を自らの声で伝えたい、という強い思いがあったのです。

—ハリス君の叔母に、再び話を聞いたんですね。

叔母は「ハリス君に強く言い過ぎたけど、何か言うことで、あの子が酷い目にあうのじゃないかと心配なのです」。そして、「いつもお前たちの国じゃないと言われて、虐げられてきた。多くは望みません。生まれ育ったところに戻りたいだけです」。彼女もまた、心に大きな傷を負っていたのです。

事態は現在進行形

—心に残った、子どもたちの言葉を教えていただけますか。

ボリアちゃんの「英語が勉強したい、あなたたちとしゃべれるから」。他者とコミュニケーションをとりたい、という強い思い。素朴だけど、心に残る言葉でした。そして、ハリス君の「お父さんは国連の職員だった。英語ができれば、国連とかで働くこともできるので、ミャンマー語だけでなく、英語も勉強したい」。ミャンマー軍に殺されたお父さんと同じ職業に就きたいというのです。ハリス君は「自分の言葉で伝えたい」とも言いました。まわりからいろいろ言われているなかでも、自分の声で伝えたい。あの強い思いは、本物だと思いました。

—ミャンマーには、ノーベル平和賞を受賞したアウンサン・スーチーさんがいるのに、どうしてこうなっているのか、という声をよく聞きます。

難民キャンプでは、スーチーさんの話は聞かれませんでした。ミャンマーでは、ロヒンギャの人々に対する国民感情は極めて悪い。国内には135の民族がいますが、ロヒンギャの人々については「バングラデシュからの不法移民」という認識です。スーチーさんは、国際社会の批判の声と自国民との板挟みになり、難しいかじ取りを迫られているのかもしれない。



ロヒンギャの子どもたち取材する山中さん ©フジテレビ

—今後の国際的な支援について。

ストレスは今、バングラデシュにも生じています。コックスバザールには、住民の2倍近い難民が押し寄せ地元の負担も深刻な状況で、難民生活の先は見えていません。すべてがギリギリで表面張力一杯まで水が溜まったような状況です。難民たちの命を落とさないように、支援を行き渡らせるためには、1つの組織、1つの団体では難しい。いろいろな組織、団体が、手を取り合っで同時進行でさまざまな支援を継続しないといけない。そして、支援する側には、ロヒンギャの人々のルールや文化への歩み寄りが必要だと強く思います。

—解決への道筋は、見えているのでしょうか。

私自身は、解決策を正直、提示できません。ロヒンギャの人々のことを考え出すと、今もなお謎や疑問が湧き出てきます。でも、知るという行為って、すごく大事です。知ると、人はしゃべりたくなる。日本にいと、遠く離れた国の大変な話……で終わってしまいます。でも、現地に行くと、私たちと同じ血の通った人間が逆境にあって苦しんでいる、ということがわかります。

—私たちがすべきことを改めてお話しください。

今、目の前に困っている子どもたちがいる。この瞬間を、生き延びようとしている子どもたちがいる。明日には死んでしまうかもしれない命がある。仮に1日に必要な金額が1人100円だとしても、120万人分だと1日1億2,000万円、1か月で36億円が必要になります。でも現状ではまったく足りていません。だから、「緊急性」が重要なキーワードなのです。私たちが実践している「FNSチャリティキャンペーン」が、ユニセフの「ロヒンギャ難民緊急募金」に全面的に協力している意味は、そこにある。事態は、現在進行形なのです。

(聞き手・平田篤州)



ロヒンギャの人々

イスラムを信仰しており、母語は、バングラデシュの方言に近いロヒンギャ語。ベンガル地方（現在のバングラデシュ）に起源を有するとみられている。イギリスの植民地時代の19世紀にビルマ（ミャンマー）のラカイン地方に流入して土着化。100万人を超える人々が暮らすようになった、とされる。しかし、ミャンマーでは、「不法移民」という認識が浸透しており、ロヒンギャの人々を民族として認めていない。1982年に国籍をはく奪され、1978年、1991年、2012年、2016年にもミャンマーから流出している。ロヒンギャの人々は、民族名称を認めてもらったうえで、ミャンマーの国籍が与えられるように訴えている。

FNSチャリティキャンペーン

FNSは、Fuji Network Systemの略で、おもに番組の相互供給を目的に組織されたテレビ局の全国的なネットワークシステム。基幹局は、フジテレビ、関西テレビなど8局で、28社で構成されている。チャリティキャンペーンは第45回を数え、2018年度は「緊急支援・ロヒンギャ難民 in バングラデシュ」のテーマで善意を募り、集まった浄財は、公益財団法人「日本ユニセフ協会」を通じて、ロヒンギャ難民の子どもたちの支援に役立てられる。